

派遣者番号	管 R 4 K 1 0	氏 名	奈良 信一郎
研究主題 —副主題—	ソーシャル・キャピタルの視点に立ったミドルリーダーの連携 —「ミドルリーダー連携プロセスモデル」の活用を通して—		
派遣先大学	東京学芸大学 教職大学院	指導担当者	浅野 あい子
所属	東大和市立第二小学校	所属長	大桃 昌博

キーワード： ソーシャル・キャピタル ミドルリーダー 連携 関係性の醸成

要旨：本研究の目的は、「ミドルリーダー連携プロセスモデル」の開発並びに有用性の検証、さらにミドルリーダーの連携に影響を与える要因を探ることである。この目的を達成するために、実態調査を基に「ミドルリーダー連携プロセスモデル」を開発し、実践を行った。そして、アクションリサーチを通してモデルの有用性をソーシャル・キャピタルの視点から分析・検証した。本研究を通して、ミドルリーダーの連携の質の高まりや、学校課題の組織的な解決に向けた動きを生み出すために、「ミドルリーダー連携プロセスモデル」が有効であることを明らかにした。また、ミドルリーダーの連携に影響を与える要因には次の3点が挙げられる。

- (1) 情報共有のための計画的・組織的な会議を開催すること
- (2) 会議を通して決定し実践に移すこと
- (3) フラットな関係で率直に話し合うこと

であり、このことをソーシャル・キャピタルの視点から明らかにした。

ソーシャル・キャピタルの視点に立ったミドルリーダーの連携 —「ミドルリーダー連携プロセスモデル」の活用を通して—

奈良 信一郎

1 研究の目的

本研究の目的は、「ミドルリーダー連携プロセスモデル」の開発並びに有用性の検証、さらにミドルリーダーの連携に影響を与える要因を探ることである。具体的には、実態調査を基に「ミドルリーダー連携プロセスモデル」を開発し、実践をする。そして、アクションリサーチを通してモデルの有用性をソーシャル・キャピタル（以下、SCと示す）の視点から分析・検証する。

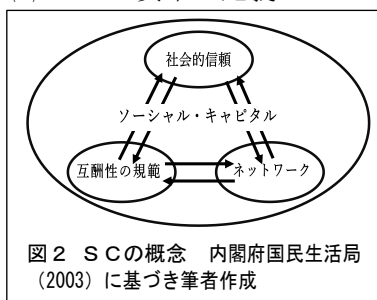
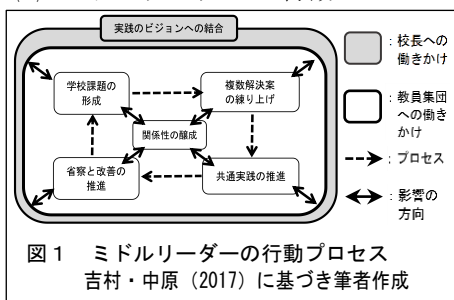
2 研究の方法

(1)理論研究 ・ミドルリーダーの役割 ・ミドルリーダーの行動プロセス ・SCの資本	(2)基礎研究 ・実態調査 (インタビュー調査・質問紙調査)	(3)実践研究 ・「ミドルリーダー連携プロセスモデル」の開発 ・本モデルを通じたアクションリサーチ	(4)まとめ ・モデルの有用性の検証 ・影響要因の検討 ・成果と課題、活用法
---	--------------------------------------	---	---

3 研究の成果

3-1 理論研究

(1) ミドルリーダーの行動プロセス (2) SCの資本・定義



理論研究から、SCについて、「教員の協働を促す『一般化信頼』『持続的互酬性』『水平ネットワーク』と定義することとした。

3-2 実践研究 3-2-1 「ミドルリーダー連携プロセスモデル」の開発

理論研究、基礎研究で明らかにしたミドルリーダーの行動プロセス及びSCの視点を活用し、学校の課題解決に向けたミドルリーダー連携における行動を以下のように意図した。

(1) ミドルリーダーの行動プロセスの援用

「学校課題の形成」…様々な事柄についての情報収集、学年や分掌を超えた共有
「複数解決案の練り上げ」…多様な当事者としての解決策の検討、他教員の巻き込み
「共通実践の推進」…解決策実践の目的や方法の共通理解に向けた研修実施、日常的な校務遂行の支援
「省察と改善の推進」…取組の評価、次の実践に向けた評価の活用

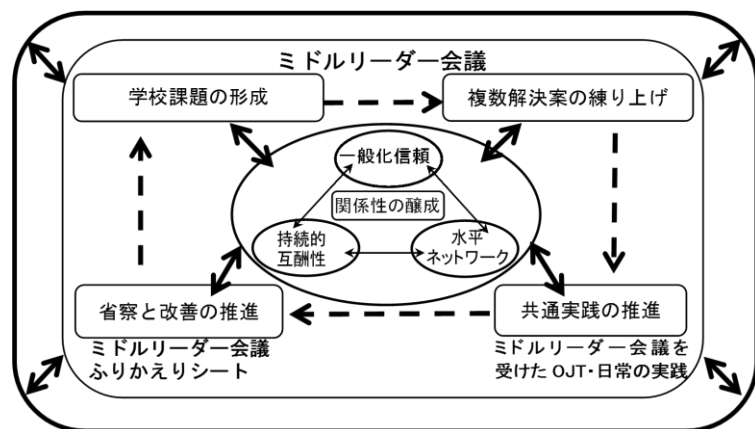


図3 「ミドルリーダー連携プロセスモデル」 出典：筆者作成

□：教員集団への働きかけ
→：プロセス
↔：影響の方向

(2) SCの視点を活用した「関係性の醸成」

「水平ネットワーク」…ミドルリーダー会議の組織化、ネットワーク構築の環境設定

「持続的互酬性」…長期的に互いにとって効果的な活動づくり

「一般化信頼」…専門性や経験の活用、所属を超えた関わり合いによる信頼関係の構築

3-2-2「ミドルリーダー連携プロセスモデル」の有用性の検証及び影響を与えた要因の検討

アクションリサーチ後のインタビュー調査結果をSCの視点から分析した。「水平ネットワーク」については、情報共有による共感や相互理解が進み、ミドルリーダーの連携の必要性を実感していたことが分かった。また、今後も率直に話し合える連携を継続して課題解決を目指そうとする様子から、本モデルによって「水平ネットワーク」が醸成されたと言える。次に「持続的互酬性」については、若手育成という具体的な活動が行われ、周りを巻き込んだ活動が活性化していったことが分かった。困難な中でも相手のために活動を日常化につなげようとする意識が定着してきており、本モデルによって「持続的互酬性」が醸成している萌芽がみられた。さらに「一般化信頼」については、課題解決に向けて分掌や学年などの所属・立場を超えた連携が図られ、組織改善につながる動きが一部みられた。本モデルによって「一般化信頼」が醸成され、広い信頼関係構築のきっかけを生み出したと言える。

計画的・組織的な会議開催による情報共有が行われ、課題解決に向けた実践の場が保障されることが、連携に効果的な影響を与える要因だと明らかになった。一方で、話し合いが問題提起に終始したり、過度な役割分担を強いられたりする場合、連携が滞ることが示唆された。

4 まとめと課題

成果として2点挙げる。第一に、ミドルリーダーの連携の質の高まりや、学校課題の組織的な解決に向けた動きを生み出すために、「ミドルリーダー連携プロセスモデル」が有効であることを明らかにした点である。第二に、ミドルリーダーの連携に影響を与える要因が、情報共有のための計画的・組織的な会議の開催、会議を通して決定し実践に移すこと、フラットな関係で率直に話し合うことであるとSCの視点から明らかにした点である。

さらに、これらの成果から、ミドルリーダーの連携は、学校組織全体に効果を広げる可能性をもつと考えられる。例えば、ミドルリーダーの連携場面を若手教員が参観するなど、若手育成の機会とすることで、若手教員の次代のミドルリーダーとしての自覚が促されるとともに、求められる行動や役割を体験的に学ぶことができる。これにより、ミドルリーダーを中心とした課題解決を図る組織文化の醸成・定着が進み、学校全体の組織的な課題解決が図られるとともに、持続可能な組織改善につながる事が考えられる。

課題は2点である。第一に、本モデルで行った枠組み及び実践的な運用が流動的な学校組織に効果的であるか検討できていない点である。第二に、事前事後の質問紙調査から明らかになった管理職の視点について、さらなる分析が必要である点である。

5 成果の活用法

都内各学校へ本モデルの有用性を示し、学校内の様々な組織における連携の分析及び実践を行う上での指標としたり、校内研修運営で連携推進を図ったりしてことに活用する。

6 主な参考文献

露口健司(2019)『ソーシャル・キャピタルで解く教育問題』ジダイ社

吉村晴美・中原淳(2017)「学校改善を目指したミドルリーダーの行動プロセスに関する実証研究」日本教育工学会論文誌40(4)(pp.277-289)

内閣府国民生活局(2003)『ソーシャル・キャピタル:豊かな人間関係と市民活動の好循環を求めて』日本総合研究所